
思春期の自閉症児をもつ母親への
心理教育的アプローチの試み

小林隆児 新保友貴

発達心理学と医学 第1巻 第1号 別刷

(1990年3月)

医学振興社

〒113 東京都文京区本郷5-29-12-1403
電話 03-818-0181 (代表)

思春期の自閉症児をもつ母親への 心理教育的アプローチの試み

小林隆児* 新保友貴**

抄録：この報告は思春期にさしかかる自閉症児をもつ親を対象に、彼らの生きざまに対する理解を深めることで思春期の発達を促進させることを意図した、1つの心理教育的アプローチの試みである。対象は10～13歳になる前思春期の自閉症児をもつ母親10名。各セッション2時間で、計4セッション行った。この中で思春期に入ってからの子どもの示すさまざまな変化に対する親の不安が集中していた。そこで自閉症児の示す問題行動をネガティブな面としてのみとらえるのではなく、彼らの現実適応への志向性の表れとして理解するように努めることを提案した。さらに、前思春期に入ると、自閉症児も依存と反発を強く示しはじめていた。これは前思春期の「再接近期」といえるものであったが、自閉症児の場合は幼児期にはこうした依存欲求を余り示さないため、母親にとっては初めて体験する母子の依存関係に対する喜びとある種の戸惑いが併存し、母子の間に幼児期には無かったアンビバレントな状態が生じていた。したがって、母親に対して幼児期のような過度な接近からいかに脱却していくかを援助していくことが、自閉症児の前思春期の発達の促進には重要な作業である。

発達心理学と医学 1(1); 91-97, 1990

Key words : psychoeducation, autism, pre-adolescence, rapprochement crisis

1. はじめに

最近、精神科児童外来では自閉症児の中でも年長児の相談が増えてきている。その内容は思春期に入って精神状態が悪化するのではないかと、てんかんが発症するのではないかとといった思春期における自閉症児の病態の悪化に関する親の不安が中

Psychoeducational approach to the mothers of autistic children in adolescence

* 大分大学教育学部

[〒870-11 大分市大字旦野原700]

Ryuji Kobayashi : Faculty of Education, Ohita University, 700 Dannoharu, Oaza, Ohita, 870-11 Japan

** 福岡大学医学部精神医学教室

[〒814-01 福岡市城南区七隈7-45-1]

Yuki Shinbo : Department of Psychiatry, Fukuoka University School of Medicine, 7-45-1 Nanakuma, Jonan-ku, Fukuoka, 814-01 Japan

心となっている。従来の自閉症児に対する理解は幼児期を中心とした行動特徴についてであり、思春期に至っても「自閉症」を従来からの固定観念でもってとらえ、彼らのもつ対人関係や言語面の障害にのみ関心を注いで理解しようとしがちであったため、現実に入思春期に入ってから彼らにさまざまな変化が起こると親の側の不安は強くなるばかりであった。しかし、自閉症児も何らかの障害をもちながらも他の子ども達と同様な生物心理的機構でもって発達していくことが年長自閉症研究(小林, 1985; 中根, 1983)によって次第に明らかになってきた。そこで筆者らは、親のもつ不安を積極的に取り上げながら自閉症児が思春期前後に示すさまざまな変化に対し、どのように理解し援助をしていくかを助言していくことが、思春期に入ろうとする自閉症児をもつ親に対して特に重要であると考え、そうした自閉症児をもつ親を対象に「年

長自閉症児のための家族教室」を試みた。その過程の中で親の目からみた思春期（今回は対象児の年齢により特に前思春期に焦点を当てた）の自閉症児自身のもつ不安と親のもつ不安が明らかになったので、この時期の自閉症児とその家族への援助のあり方について考察し報告したい。

2. 家族教室の対象と方法

福岡大学病院精神神経科に通院中の自閉症児の中で10歳以降の子どもをもつ親と、福岡市内の小中学校情緒障害特殊学級（主に自閉症児を対象とした学級）在籍児童の親に案内状を配布し、参加希望のあった10名の母親を対象とした（表1）。該当自閉症児の年齢構成は10歳1例、11歳4例、12歳3例、13歳2例で全例とも男児であった。家族教室の運営方法は全員参加による円卓状の討論形式で行い、司会は筆者の一人小林が担当した。セッションは隔週1回、月曜日午前10時から12時までの2時間、計4回施行して全セッションを終了した。討論記録は参加者の理解を得たうえでビデオ録画し、各セッション終了後討論内容を検討し次回の進行の参考に供した。

3. 家族教室の進め方

1. 家族教室の開催趣旨についての説明

司会者から今回の家族教室の開催の目的につい

て、思春期の自閉症のしつけや指導のあり方についての相談が増加してきたこと、親の不安を積極的に取り上げながら治療者と共に彼らの病理についての理解を深めたいこと、さらには子ども達の今後の成長を促すための工夫をどのようにしたらよいかをみんなと一緒に考えていきたいことなどの説明を行った。

2. 参加者及び子供のプロフィール紹介

参加者は全員現在前思春期ないし思春期前期の自閉症児をもつ母親で、全セッション参加した人は計10名であった。各自閉症児の年齢、性別、学校の種別、学年、知的水準は表1に示す通りであった。以下の討論内容の発言者については表1に示した症例別のアルファベット（A～J）を使用して記載した。

3. アンケートによる子どもに関する悩みや不安の把握

次に母親が現在子どもに対する最も大きな心配は何かをアンケートにより記載してもらった結果をまとめると、表2に示すような内容であった。特に多いのは思春期の問題は勿論であるが、その他にはこだわりが強いこと、言葉の遅れや会話能力に乏しいこと、交友関係がもてないこと、さまざまな問題行動（奇声、自傷行為、他傷行為、自慰行為など）など、さらには将来の進路をめぐる問題など広範囲に及んでいた。

表1 参加者の自閉症児に関するデータ

母親	自閉症児の年齢	性別	学年（学校）	精神遅滞の程度
A	10歳	男性	小学5年（普通学級）	中等度
B	11歳	男性	小学6年（特殊学級）	軽度
C	11歳	男性	小学6年（特殊学級）	中等度
D	11歳	男性	小学6年（特殊学級）	軽度
E	11歳	男性	小学6年（特殊学級）	中等度
F	12歳	男性	小学6年（普通学級）	軽度
G	12歳	男性	中学1年（特殊学級）	軽度
H	12歳	男性	中学1年（養護学校）	中等度
I	13歳	男性	中学1年（普通学級）	軽度
J	13歳	男性	中学2年（養護学校）	重度

表2 参加した母親のもつ子どもに対する不安の内容

母親	自分の子どもに関する最も大きな心配や不安
A	集中力がない, こだわり, 思春期の問題
B	独言, 言葉の遅れ, 思春期の問題, 交友関係がもてない
C	思春期の問題, 変な癖, 独言
D	欲求が阻止されると奇声を出す, 言葉遣いが荒い, 性器を触る
E	多動, こだわり, 情緒不安定, 思春期の問題, 将来の処遇
F	こだわり, 会話の困難さ, 他傷行為, 奇声
G	友達がいらない, 将来の自立の可能性
H	言葉の遅れ, 心身のアンバランス, こだわり
I	こだわり, 学校での不適応(異性への関心の高まり)
J	自傷行為, 学校の適応, 将来の処遇, 思春期をどう乗り越えるか

4. 家族教室の討論内容

1. 第1～2回

先に述べたアンケートの結果を参考にしながら、母親のもつさまざまな不安を主題にして話しを進めていった。全員から現在最も気になっている問題行動を自由に語ってもらい、それぞれの行動の背景にあるものは何かを考える方向で話しを進行していった。そこで司会者から、今までに列挙された問題行動を次のような視点で整理したら自閉症児に対する理解のヒントが得られないか、と1つの視点を提起してみた。

- (1) 自閉症児自身のもつハンディから当然起こる行動(会話能力の限界や強迫的こだわりなど)
- (2) 成長過程で当然起こる行動(言葉遣いの悪さなど)
- (3) 周囲の人との相互理解の困難さから問題となりやすい行動(他傷行動など)
- (4) 将来の処遇に関する問題(施設入所, 就職の可能性など)

こうした問題行動の中から自閉症児の最も特徴的な行動で取り上げられやすいものの1つである「強迫的こだわり」について取り上げて、参加者全員で討論することにした。すると「自分の我を強く通そうとする。あきらめが悪い」(F), 「何かをいつも持ち歩く」(A), 「風呂をのぞく」(F), 「トイレの形が気になりトイレをのぞく」(H),

「スイッチへのこだわり」(E) など多くの自閉症児の示す強迫的こだわりが語られたが、その多くはこうした強迫的こだわりをいかに修正するか、いかになくしていくかということに苦心していることがうかがわれ、母親はこうした行動を余りにもネガティブにとらえがちであることが明らかになってきた。司会者からは、こうした強迫的傾向は思春期にもなると人格の一部を形成するほどまでになり、行動そのものを修正したり、なくすことを第一義的に考えるとかえって彼らの強迫的行動を強める結果をもたらしやすいことを解説した。そこで彼らの行動特性、ないし個性としてポジティブな視点でもって理解してはどうかという新たな提起をして、こうした特性をどう活かすかという視点をもつことも重要ではないかと問題を投げかけた。すると母親側から「弟と同じ行動をしても自閉症児だと彼らの行動を色眼鏡で見てしまうところが自分には多分にあることが分かる」(B), すなわち「自閉症」というレッテルで彼らを固定的にとらえがちであるとする受け止め手の側にも問題があることが語られ始めた。そこで司会者は、たとえとしてトイレにすぐに逃げ込むような自閉症児を取り上げ、自閉症児が社会の中で周囲の世界を自分との関係で位置づけることが極めて困難であるなどの特有な認知障害を有する(小林, 1982) ために、そうした了解困難な状況に自分が置かれると、そうした場からの回避行動として強迫的こだわりが生じている側面があること、すなわちこうした症状は彼らの不安の防衛としての機

能があるので、そうすることで自分を保っているということを理解するのも大切ではないかと述べた。すると「彼らも素直なんですね」(F)と自閉症児の気持ちに共感的な発言が生まれるようになった。

次に、自閉症児の強迫的行動の表れである幼児期の同一性保持とは異なり、思春期に出現しやすい強迫意識を伴った強迫症状(中根, 1985)について解説し、これは幼児期のこだわりと異なり、彼らが自我の成長に伴って適応志向性が高まるにつれ、対人関係の中で生じるさまざまなハンディキャップからくる適応困難によってもたらされた不安からの回避行動として出現しやすく、こうした強迫症状は自閉症児の心理的危機のサインとして受け止める必要性を強調した。すると母親側から「自閉症児も心の葛藤が存在するんですね」(F)という驚きと共感が生まれ、自閉症児の理解には彼らの置かれている状況と心理状態を検討することが必要であるとする共通理解が芽生えてきた。しかし彼らの強迫的行動がしばしばコントロール困難な状況に陥り易く、それをどのように援助したらよいかということが話題にのぼってきた。そして母親のみでは思春期の子ども達に対処することの困難さが次第にクローズアップされ、父親への期待から現在の父親の果たしている役割が問題となっていった。そこで次回それを討論することにし、それまでに家族で話し合ってくることを課題として親に課した。

2. 第3～4回

第3回のセッションで前回出された課題が全員から語られた。全体的には子どものことを母親まかせにして仕事に忙殺されていることはたしかであったが、現在の父親は以前に比べかなり子どもに関与している姿が認められた。しかし、より社会的存在である父親が自閉症児を子どもにもっていることにより周囲の目を非常に気にしやすいこと(E)、一方では施設づくり運動に奔走するという母親には困難な役割を積極的に担っていること(B)など、母親とは異なった子どもへの関与の姿が浮き彫りにされた。

そして次第に父子関係と母子関係の相違へと移っ

ていき、自閉症児がこの時期に母親に示す依存欲求の高まりと同時に母親の過度な接近に対する強い反発が語られ始めた。「家の柱時計の音を酷く嫌がり、夜寝る前にはその時計を必ず柱からはずしてしまい、寝ていると母親の布団の中に潜り込んでくるんです」(D)というように自閉症児が夜になって依存欲求が高まっている様子や、「町を親子で歩いていると、自分からは父親の手をつなぎたがるのに、父親の方から手を取ろうとすると、エイズがうつると言って拒否をする」(I)、「母が風呂に入ろうかとタイミングを見ていうと一緒に入るが、先に自分一人で入っていて母親が後から入ろうとすると拒否するんです」(H)といった親に対するアンビバレントな心性がこの時期顕著になってきていることを示す発言が続いた。この時期(前思春期)自閉症児にも依存と反発が強まってくるのがだんだんと明らかにされてきた。

そしてこうした自閉症児の行動の変化に対して、母親の方にも幼児期には母子間で十分な依存関係を体験出来なかったことの寂しさが強かったがために、この時期になって改めて体験する母子間の依存関係に対するある種の喜びと、「可愛いけどね」(I)に象徴される自分の体格より大きい子どもが甘えてくることによる母親側の内的な緊張と強い戸惑いが存在していることも、同時に明らかになっていった。

そこで司会者は、思春期に入ってゆく過程(前思春期)の子ども達の精神発達の特徴とその時期の親子関係の変化について力点を置いて説明し、母親の子どもへの関与のあり方を次第に変えていく必要があることを述べた。この過程の中で母親自身がいだけ不安を父親と共有化することが母親の不安を和らげるのみならず、子ども達にとっても分離個別化(Mahlerら, 1975)の過程をよりスムーズにしてゆくであろうと助言し、このセッションを終了した。

5. セッション後の評価

4回のセッションを終了した1週間後に、今回の家族教室に対する評価をアンケートにより確認

した。その結果は以下の通りであった。

ほとんどの人がかなりの満足を示した。さらに具体的に参考になった点を尋ねると、

- (1) 子どもの心理と周囲の理解との間にかかなりのギャップがあること、そのことが子どもの行動を悪化させている面があること、
- (2) 思春期に入ると自閉症児にも依存欲求の高まりと同時に反発が強まること、そしてそのことを思春期の心性として理解する必要があること、
- (3) 強迫的こだわりには積極的意味をもたせることも大切であること、そのためにはこだわりをなくさせようとするのではなく、良いものにこだわりをもたせるように工夫していく必要があること、
- (4) 子どもの心理的危機のサインを見出す努力を周囲の人々が心がける必要があること、
- (5) 子どもの思春期の成長のためには父親の協力が重要であること、ぜひ父親に対してもこうした試みをしてほしいこと、

などが列挙された。

6. 考 察

1. 思春期の自閉症児をもつ家族への心理教育的アプローチの意義

自閉症児に対するわが国での取り組みもすでに30年以上経過し、最近では年長自閉症に関する問題が最大の関心事になっている（小林, 1985; Schopler ら, 1983; 若林ら, 1986）。中でも自閉症児は思春期に至ると、それまでの最も安定した学童期とは様相を異にし、病態が悪化しやすく（DeMyer, 1979）、その背景には生物学的要因が強く関与している（Gilberg, 1981）とされている。確かに自閉症児は思春期に入って病態が悪化する場合はあるが、時には思春期に自我の成長を認め、自立の方向に向かう契機となることもあり、あながちネガティブな側面ばかりとはいえない（小林, 1985）。自閉症は生物学的次元でのなんらかの脳の機能障害を有する発達障害としてとらえられるようになってきているが、彼らも他の子ども達と同様な生物心理的機構でもって発達していく

（中根, 1983）ことを考慮に入れておかないと、自閉症児の発達のポジティブな側面を見落としてしまうことにもなりかねない。したがって、そうした障害を持ちながらも生きている生物・心理・社会的存在として彼らの生きざまへの理解と援助に努力することは、彼らへの日常の治療や指導にとって不可欠な要素である。そうした理由から今回初めての試みとして、思春期に入ろうとしている自閉症児をもつ母親を対象にして、思春期の自閉症児に対する理解を促進するために「家族教室」を開催した。こうした試みは自閉症児の発達を促進していくために、自閉症児の発達に対する理解を深めていくことを主たる目的とした、いわば心理教育的アプローチといえるものである。ただ自閉症児を対象としたこうした試みはいまだ方法論には未確立な点が多い。今回の試みも子どものどのような問題に親がどのような不安をいただき、それをどのような手段で解決していくかの手がかりを探ることを意図したものであった。そこでさまざまな障害をもちながらも生きている自閉症児の心性を、どのように理解すれば彼らの発達の援助につながるのかを中心の課題とした。

2. 前思春期における子どもの精神発達の特徴

今回の対象児は10歳から13歳までの年齢幅で、その発達段階からみると前思春期にあたる。前思春期は身体の第二次的性徴に伴う欲動の増加、潜伏期に保たれていた欲動と自我の平衡の変化、退行と退行に対する防衛の交互出現の3つの特徴をもって定義されている（Blos, 1962）。すなわち、身体の自己像の変化や性衝動の高まりによって従来の自己イメージは大きな変化を余儀なくされると同時に、こうした不安定な自我状態は急激な依存欲求の亢進という退行的要素と親への反発という発達の要素とはアンビバレントな結果を生み出す、それらは渾然一体となって併存しているというのが前思春期の最大の特徴の1つである。そのためこの時期は精神発達の中でも極めて危機的状況を生みやすいとして、ライフサイクル上でも近年特に重視されている（Ushijima ら, 1988）。

3. 前思春期の自閉症児の示す問題行動と精神発達の特徴

自閉症児が思春期に入ると親の不安がいかに強まるかは今回の調査結果(表2)にもよく示されているが、その内容はかなり広範囲にわたっている。それらをその要因から整理してみると、自閉症児共通のハンディキャップがあるがために起こる行動、人間の成長過程の中で特に思春期に至る際には必ず起こる行動、周囲からの理解が乏しいなど状況因子が強く関連していると思われる行動などに分けることが可能と思われる。こうしてみると、自閉症児のハンディキャップにもとづく行動は少なくないにしても、「自閉症」のラベルを除去して一般の思春期心性の特徴を把握した上で問題行動を再度とらえ直してみると、彼らの示す問題行動といわれるものも思春期心性の表れとして把握することが可能と考えられる。こうした問題提起は、自閉症児をもつ親が自閉症児の行動をただ自閉症のもつ生来のハンディキャップと直線的因果関係で理解する傾向が強いことを考えると、初期の段階でこれらの問題行動のとらえ方の視点を広げる必要性を強調することになるという意味で、非常に重要である。

確かに自閉症児の思春期問題はすでに多く語られてはいるが(DeMyer, 1979; Schopler ら, 1983)、その大半は「性」に焦点が当てられている。しかし、思春期の「性」が問題となる前段階の前思春期発達は、自閉症児の母子関係にとって重要な変化の契機となる時期である。そのことを裏付けるかのように今回の試みの中で母親の報告を通して明らかになった彼らの家庭の中で示す行動の中には、思春期心性を示唆するものが少なくない。その中でも特に自閉症児はこの時期になって、急速に母親に強い依存欲求を示し始めるとともに、今までにない母親への強い反発が出現している。この種の現象はいわゆる再接近危機(Mahler, 1975)といえる状態であるが、自閉症児の場合は幼児期の母子の依存関係が成立し難いことから、この時期になって母子の間で依存関係が初めて深まるということが特徴である。

わが国では障害児の療育が次第に制度化されてきているとはいえ、いまだ母親の役割と負担は重

く、子どもの幼児期のみならず思春期に入っても養育に対して占める割合は大きい。母親はみずからの生き甲斐もその中に見出し、子どもに深い愛情を注いでいることから、自閉症児の場合も母子の間での依存関係はこの時期に急速に強まっていく傾向をもつ。ここに自閉症児の親子には他の精神障害に比し特に母子分離を困難にしやすい要因があると考えられる。すなわち母親は育児の中で子どもが母親に示すさまざまな要求や依存欲求を充足してやることを通して初めて母親らしさを獲得していくことを考えると、自閉症児をもつ母親はそうした母親としてのアイデンティティの獲得が容易ではないことは推測に難くない。前思春期に彼らが示す強い依存欲求は母親にとって初めて体験する喜びの体験でもあるわけで、一方では親よりも身体面で成長した子どもの示す依存的行動を受け入れることの強い抵抗感が存在するため、母親の心理はアンビバレントな状態になるであろう。このことがこの時期の自閉症児の母子関係をより複雑なものにしていく恐れがある。したがって、以上述べてきたような思春期にさしかかる自閉症児をもつ母子関係の特徴を踏まえながら、母親に対して幼児期のような過度な接近からいかに脱却していくかを援助していくことが、自閉症児の前思春期の発達を促進していくうえからも重要な作業である。

本論の要旨は第9回西日本精神神経学会総会(1987年10月、岡山市)において発表した。なお本研究の一部は福岡大学医学部自閉症治療研究班(班長:村田豊久)に対する福岡県からの助成金によった。

最後に懇切丁寧な御指導と御助言をいただきました村田豊久院長(村田クリニック)に心より感謝申し上げます。

文 献

- Blos, P. (1962). *On adolescence— a psychodynamic interpretation*. New York: Free Press.
- Gilberg, C., & Schaumann, H. (1981). Infantile autism and puberty. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 11, 365-371.
- 小林隆児 (1982). 言語障害像からみた年長自閉症児者に関する精神病理学的考察. *児童精神医学とそ*

- の近接領域, 23, 235-260.
- 小林隆児 (1985). 自閉症児の精神発達と経過に関する臨床的研究. 精神神経学雑誌, 87, 546-582.
- 久保紘章, 入谷好樹 (訳) (1986, 1987). 自閉症と家族——児童編, 青年編. 東京: 岩崎学術出版.
- (DeMyer, M.K. (1979). Parents and children in autism. New York: John Willey.)
- 中根 晃 (1983). 自閉症の臨床——その治療と教育. 東京: 岩崎学術出版社.
- 中根 晃 (1985). 自閉症の精神病理——青年期自閉症と強迫症状. 昭和60年度自閉症療育体系に関する総合的研究報告書 (pp. 118-125). 厚生省心身障害研究班.
- 中根 晃, 太田昌孝 (監訳) (1988). 青年期の自閉症 —— ①個人生活の確立, ②家族と社会 ——. 東京: 岩崎学術出版. (E. Schopler & G.B. Mesibov (Eds.) (1983). Autism in adolescents and adults. New York and London: Plenum Press.)
- 高橋雅士, 織田正美, 浜畑 紀 (訳) (1981). 乳幼児の心理的誕生——母子共生と個体化. 名古屋: 黎明書房. (Mahler, S.M., Pine, F., & Bergman, A. (1975). The psychological birth of the human infant. New York: Basic Books.)
- Ushijima, S., & Kobayashi, R. (1988). Perimenarche syndrome (A proposal). Japanese Journal of Psychiatry and Neurology, 42, 209-216.
- 若林慎一郎, 杉山登志郎 (1986). 自閉症と青年期——医学の立場——. 発達障害研究, 7, 252-259.

第17回国際神経精神薬理学会議について

国際神経精神薬理学会 (Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum, 略称C.I.N.P.) の国際会議は、世界の精神医学者および精神薬理学者が挙って参加し、精神神経疾患の病態解明と薬物療法に関する最先端の研究成果を競い合い、また、最近の進歩を展望する会であり、精神神経薬理学領域の臨床家は無論のこと、基礎の研究者や向精神薬を開発している製薬企業にとっても世界で最も情報に富んだ会議として重要視されている国際会議です。本会の伝統に沿って、今回も日本および国際プログラム委員会の慎重な検討を経て64題のシンポジウムと6題の特別講演が選定されました。これによって、当該領域のほとんど全ての今日的话题が網羅されています。加えて、例年粒揃いと定評のある一般演題でも口演およびポスターにより最先端の研究成果が多数発表され、また、関係者にとって最新の進歩の情報源として好評な医薬・機器の展示も大規模に行われます。この会議が日本で開催されるこの好機に、是非ご参加下さい。当会議の概要と出題および優待参加登録の締切は以下のとおりです。詳しくは下記事務局にお問い合わせ下さい。

記

1. 会期：1990年9月10日（月）より14日（金）まで
2. 場所：国立京都国際会館（京都市宝ヶ池）
3. 主催：国際神経精神薬理学会（C.I.N.P.）、
第17回国際神経精神薬理学会議組織委員会、
財団法人 国際科学振興財団
4. 後援：日本学術会議、日本薬理学会、日本神経精神薬理学会
5. 会長：Allec Coppen, M.D. (英国MRC神経精神医学研究所長)
6. 組織委員長：島菌安雄（国立精神・神経センター名誉総長）
7. 主要プログラム：
特別講演：「セロトニンと精神医学（演者：Prof. Graham-Smith）」ほか5題
シンポジウム：「高橋良記念シンポジウム：感情障害とモノアミン機能」ほか63題
8. 一般演題締切：1990年3月末日（要抄録提出、用紙は2ndサーキュラー綴込み）
9. 登録優待期間：1990年5月末日まで（会員；3万円、非会員；4万8千円、
学生；2万5千円、同伴者2万円）
10. 事務局：〒107 東京都港区赤坂1-8-10 興和ビル
（株）サイマル・インターナショナル内
第17回CINP会議組織委員会事務局
電話；03-586-8691, FAX；03-583-8336

以上
